

SANZUI vol.01_2013 summer

特集 声





SANZUI vol.01_2013 summer

CONTENTS

COVER

Photo / Ko Hosokawa

Model / Satsuki Moro (2013年5月8日生まれ)

02

特集 声

04-09

声のこだわり

島田歌穂

立川志の輔／山川静夫

原田直之／Metis／木村 昂

10

日本の声優の歴史
声の科学

11

名匠インタビュー

竹本住大夫

12-13

美匠熟考

黒澤明監督作品『七人の侍』のシナリオ
琉球古典芸能に使われる赤字袋

14-15

カンゲキのススメ「夏フェス」

16-19

裏舞台という名の表舞台

「緞帳」龍村美術織物
「プロジェクション・マッピング」チームラボ

20

若き実演家の未来 / 浅野 祥
瞬演の舞台から

22

リレーエッセイ 第1回

野村 萬

24-29

ロングインタビュー

坂東玉三郎

特集 声



特集 声

人間はこの世に生まれると、
真っ先に、大きな『声』で泣く。

誰もが生まれた時から

『声』で意志や感情を演じている。

舞台芸術も『声』なくしては始まらない。

では『声』とは何か？

その役割や魅力に迫る。



島田歌穂

歌手

Shimada Kaho



Special Feature
VOICE

Photo / Ko Hosokawa

声は心の響き！どれだけ心を声に響かせることができるか。
それが一生目指し続ける私の目標です。

声というと、まず思い出すのが子供の頃の記憶。私は音楽家の父と、宝塚を退団した後、ジャズ歌手をしていた母の間に生まれました。私がお腹にいた時も母はステージで歌い、父は自宅でお弟子さん達に歌のレッスンをしていた。奥の部屋でそれを子守歌代わりに聴いて育った私は、お弟子さんが音を外すとケラケラ笑って大きな声で正しい音程で歌っていたそうです(笑)。今考えると、本当に声と音楽に包まれて生まれ育ちました。

4歳の頃からバレエ、ピアノを習い始め、発表会でミュージカルの主役を演じ、それがきっかけで子役やアイドル歌手もやり、演じること、歌うことの楽しさと厳しさを少しずつ経験していきました。18歳の時、たまたまミュージカルのオーディションを受けて主役のシンデレラ役に合格。初舞台でいきなり主役…本当に

自分にできるのかという不安の中で稽古を重ね、いざ初日にお客様の前に立った瞬間、それまで自分の中で眠っていたエネルギーのようなものが、一気に心の奥底から湧き出てくるような感覚を覚えたんです。歌、踊り、芝居、大好きなことがいっぺんにできる！ああ、やっぱりミュージカルってこんなに楽しいんだ。私はもうこの道に進むしかない！と舞台の上で固く決意しました。これが私にとってのミュージカルの原点です。

私は歌も踊りも全て芝居だと信じます。歌詞は全て台詞であり、その台詞をどう解釈し、どう深く表現していけるか。よく台詞は歌うように、歌は語るようにと言われます。声の高低、強弱、リズム、テンポ、そして間…ストレーブレイで学ばせていただいていたことが歌の表現に大きく反映されていると感じます。一

番大切なのは心。そして、声は心の響き。どれだけ心を声に響かせることができるか。それが一生目指し続ける私の目標です。

やはり日本人として日本語の美しさを声に出すことは大切にしていきたいですね。井上ひさし先生の作品をはじめ、さまざまな舞台を通し、日本語の繊細さや素晴らしさを強く感じてきましたし、民謡や唱歌など、日本の歌も必ずコンサートやライブで取り入れています。西洋の作品、楽曲にも挑戦し続けると同時に、日本人ならではのオリジナルミュージカルや朗読劇、そして日本の歌を心のド真ん中に置いていきたい。父と母が残してくれたこの声で、どこまでどんな形で心を表現していけるか。それには自分自身の心もいろいろなものを深く響かせて成長していかなくては。私にとって声は本当に大切な一生の宝物です。



音楽劇「二十四の瞳」より

PROFILE 1974年子役デビュー。82年「シンデレラ」で初舞台。87年「レ・ミゼラブル」で脚光を浴び、2001年までロングランに参加。出演回数は千回を越えた。同作の世界ベストメンバーに選ばれ、日本の女優として初めて英国王室主催の「ザ・ロイヤル・バラエティ・パフォーマンス」に招待される。また、1990年にはベストキャストとして参加した同作アルバムがアメリカにてグラミー賞を受賞。ストレーブレイからミュージカル、コンサートやライブ活動など女優として歌手として幅広く活躍。芸術選奨文部大臣新人賞、紀伊國屋演劇賞個人賞、読売演劇賞優秀女優賞など受賞多数。現在、大阪芸術大学教授として後進の育成にもあたる。

立川志の輔

落語家

Tatekawa Shinosuke



Special Feature
VOICE

Photo / Ko Hosokawa

自分でいうのも何だけど、恐らく僕の声も良いほうですよ。
電話だけならどんな女でも口説けちゃう(笑)!

昔も今も落語は見に行くものじゃなくて、聴きに行くっていいです。芸の三大要素が「一声、二節、三演技」一番が声。良い声っていうのは、要するに高い低いだけではなくて幅のある声、いろんな味のある声ということでしょう。まず声が耳に心地良くないとお客さんは落語を1時間も2時間も聴いてくれない。一声二節、声でリズムや調子を取れ、そこからやっと演技なんです。どんなに演技が上手くても声がまずくちゃどうしようもない。

私の師匠談志は亡くなる最後まで、僕と仕事と一緒に時は、必ずお客さんに“俺とこいつとどっちが声が悪い”って、どっちが声が悪い合戦をやってました(笑)。声の出が悪いっていうのはあるけれど、声の質という意味では師匠の声も渋いし、自分でいうのも何だけど、恐らく僕の声も良いほうですよ。電話だけならどんな

女でも口説けちゃう(笑)。小学校の頃から君は良い声だねって先生や近所の大人に言われてたんですよ。中学3年の時に富山県の弁論大会中学生の部で優勝。その時に、これから一生懸命勉強してアナウンサーになれって先生に言われた。アナウンサーはいいなと思ったけど、その前の一生懸命勉強してっていうのが嫌だった。それで落語家です(笑)。

声の高い落語家は陽気になってお客様を笑わせる音域を持っている。人情噺や泣かせる噺なら低い方が良い。僕は人情噺が好きなんですからダミ声というか領域が低いことがありがたい。声は鍛えたりしませんよ。昔の浪曲師や講師は海に向かって叫んだり、声を潰したりして声を作った人もいたそうですね。でも落語家はできれば楽に暮らしたい。辛いことをよけて通りたいから鍛えませんよ。

でもね、落語会は大きな会場でも、小さな会場でもやります。同じ一席やるのに100人と2000人だったら多い方が大変でしょうと言われますが実際は逆。小さいとお客さんの顔が見えて照れるんですよ。照れる自分を鍛える。大きな劇場だとお客さんが見えないから、かえって楽だったり、声の出し方も小さいと地声で演じなければならないけれど、大きな劇場だとマイクが聴かせてくれる。自分の声の芸ではなく、マイクの使い方という芸なんです。

録音の無かった時分の落語家と違って今のわれわれは自分の声を聴けるどころか姿まで見られる。それでもやっぱり芸の三要素「一声、二節、三演技」は永遠に変わらないと思うし、良い声の基準も変わりゃしない。とにかく自分の声を大切にしてください。これからも高座に出続けます。



PROFILE 富山県射水市生まれ。明治大学在学中は落語研究会に所属。卒業後、劇団、広告代理店勤務を経て、1984年に立川談志に入門。90年立川流真打に昇進。人気、実力共に落語界のけん引役。毎年渋谷パルコ劇場での1ヶ月公演や全国各地での定期公演をはじめ、大小さまざまな落語会を多数開催。「ためしてガッテン」(NHK総合テレビ)をはじめパーソナリティーとしても活躍中。

山川 静夫

アナウンサー

Yamakawa Shizuo



Photo / Anna Hosokawa

Special Feature
VOICE

話せることは、人間の本当に素晴らしい能力であり、
神様から与えられた恩恵だと思います。

僕は静岡浅間神社の神主の息子です。「かけまくもかしこき～」という祝詞^{のりと}の声を聞いて育った。自分ではあまり意識していませんが、歌舞伎の大向こう、アナウンサー、そして脳梗塞^{おおむ}で倒れて失語症からのリハビリ、思えばずっと声と共に生きてきたともいえますね。

東京の大学に入り、そこで寮の仲間から歌舞伎の魅力を教わります。初めて歌舞伎座に行った時は、初代中村吉右衛門と六代目中村歌右衛門との豪華顔合わせ。踊りや所作、衣裳などももちろん素晴らしかったのですが、やはり声の表現力に度肝を抜かれました。それから役者の声色^{つか}を遣うのに夢中になり、ひょんなことから学生時代に十七代目中村勘三郎の舞台にも声色で出演することになる。これも声に関わる素晴らしいご縁ですね。

大向こうも60年間掛け続けています。NHKのアナウンサーになり、当時はラジオ全盛時代。とにかく声を酷使しては毎晩毎晩酒を浴びるように飲む。それでも僕だけはとうとう声は潰れなかった

(笑)。考えてみたら歌舞伎座の三階席からいつも「音羽屋～、成駒屋～、中村屋～」と声を掛けていた。大向こうはただ大きな声だけでは舞台に届かない。鉄砲玉のようにぼ～んと通すものです。知らず知らずのうちに大向こうで声がしっかり鍛えられていたのでしょうね。

失語症になって声に対する意識はがらりと変わりました。しゃべること、話せることは、人間の本当に素晴らしい能力であり、神様から与えられた恩恵だと思います。これを活かす、いや、活かさずして人間はあり得ない。どれだけ声が尊いものか、心から感謝しています。そして80年の人生で、ようやくわかったのは、表現は「伝える」ということよりも「伝わる」ことが一番大事。たくさんしゃべったり、うわべだけ話術で取り繕ってもきちんと相手の心に響かなければ意味がない。そして「伝わる」ためにはやはり最後は人間性。声は人なり。これからも「伝わる」ために声ととことん付き合っていきたいと思います。

PROFILE 1933年静岡県生まれ。エッセイスト。元NHKアナウンサー。紅白歌合戦白組司会を9年連続担当。NHKの顔として活躍した。2000年に脳梗塞で倒れ失語症になるが、「毎日24時間がリハビリ」の決意で短期間に復帰。歌舞伎や文楽などの伝統芸能にも造詣が深く、『大向うの人々 歌舞伎座三階人情ばなし』、『歌舞伎は恋：山川静夫の芝居話』など著書多数。



声のこだわり 04

原田直之

民謡歌手

Harada Naoyuki

生まれ育った故郷の風景が目浮かぶ、
民謡は故郷そのもの

私の生まれ育った相馬地方は郷土芸能が盛んなところで、民謡は生活と密接に結びついていました。長兄の結婚式で地元の長老が歌う長持唄に強く感動したのがきっかけで高校卒業後、吾妻桃也先生に入門。歌修行というよりもこれは人生修行でした。練習といえは、師匠の出番前に舞台で歌う一曲が全て。それも、同じ曲を2年も3年もひたすら歌い込む。この修行のお陰で声が磨かれたのだと思います。

民謡は、お腹から大きな地声を出すのが一番大切。そして声は健康のバロメーター。調子が悪ければ声は出ない。大きな声で毎日民謡を歌うのが最高の健康法ですよ(笑)。民謡は故郷と切っても切り離せないもの。山や田んぼなど、生まれ育った故郷の風景が目浮かびます。皆さんも、故郷の民謡を、一曲でも二曲でも声に出して歌って下さい。お子様やお孫さんに皆さんの声で故郷を伝えてくれると嬉しいなあ。

PROFILE 1942年、福島県浪江町生まれ。60年、第14回NHKのど自慢全国コンクール民謡の部で福島県代表となる。63年に上京し、翌年「長持唄」でデビュー。全国各地で民謡の心を歌っている。90年「全国ご町内音頭」日本コロムビアゴールデン・ディスク賞～プラチナ賞受賞。2008年「民謡名人位」受章。11年「民謡栄誉賞」受賞。現在、一般社団法人日本歌手協会理事。



声のこだわり 05

Metis

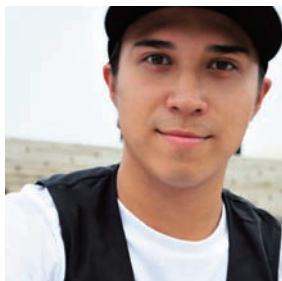
シンガーソングライター

歌うことによって自分が成長し、
声もまた変化していく

私の原点は小学生の頃に見たマイケル・ジャクソンの『スリラー』のビデオ。頭を叩かれたような衝撃を受け、もうブラックミュージックの虜に。ホイットニー・ヒューストンの歌唱力やマライア・キャリーのハイトーンボイスにも憧れて、他の子供と遊びもせずに毎日毎日、CDを聞いては練習に明け暮れていた(笑)。

声の練習はほぼずっと独学でやってきました。大切なのは声の良し悪しではなく、その瞬間瞬間にどれだけ人に愛、暖かさ、自分の思いやりを伝えられるかということだと思います。歌うことによって自分が成長し、声もまた変化して行くのだと思う。ボブ・マーリー没後に奥さんが歌った『One Love』の中の「みんな辛い時も手を取り合って一つの愛で乗り越えよう」という歌詞に自分の生き方があるような気がします。私が辛くて悲しい時に音楽で救われた様に、私の声で人を救ってあげられたらとっても幸せですね。

PROFILE 2006年デビュー。レゲエ・ソウルミュージックをルーツに持つシンガーソングライター。07年原爆ドーム前で異例のライブを行い、08年には大型フェスに20本以上出演。被災地で出会った七ヶ浜の沿岸のガレキに埋もれたピアノと避難所の合唱団の子どもたちと「人間失格～生きることは素晴らしいのです～」をレコーディング。LOVE & PEACEを伝える活動を続けている。7月にNEW ALBUM「Girls to Woman」発売予定。



声のこだわり 06

木村 昂

声優・俳優

Kimura Subaru

ジャイアン^①の力強さ、パワフルさを
どうやって声で表現するか日々模索中

僕の両親は共に声楽家だったので、グランドピアノの上に置かれたベビーベッドで眠り、ピアノの脚の近くで遊び、音楽や声を聴きながら育ちました。ドイツで生まれ、8歳で日本に来た記念に母がくれたCDの中にヒップホップMC、エミネムが入っていた。もう夢中になって、何とかエミネムのように声を出したり、歌いたくて何度も聴いては発音や声を真似してました。僕は英語をエミネムに教わった(笑)。

チャンスは突然やって来ました。中学2年の時にジャイアンのオーディションに受かってしまった。嬉しいというより怖かったけど無我夢中でやってきました。ジャイアンはガキ大将なので堂々とした声ですが、大声を出すだけではなく、力強さ、パワフルさをどうやって声で表現するかを、まだまだ日々模索しています。いつか師匠と仰ぐスネオ役の関智一さんに「おまえ、すごいな」と言われるのが、今の僕の目標です。

PROFILE 14歳の時に「ドラえもん」の剛田武(ジャイアン)役に抜擢され、現在は、アニメの他にもナレーションや自身が座長を務める天才劇団『バカバカッ!』などの活動も精力的に行っている。主な出演作品にアニメーションとしてドラえもん(剛田武(ジャイアン)役)、輪るピングドラム(高倉冠葉、ペンギン1号役)、CODE: BREAKER(平家将臣役)、ナレーションとしてNHK ドイツ語講座、NHK 探検バクモン他 多数。

日本の声優の歴史 羽佐間道夫

History

日本の声優の草分けでもあり、今も第一線で活躍する羽佐間道夫さん。

映画『ロッキー』の迫力と含蓄のある声は

浄瑠璃を海に向って語ることでトーンが作られた。

声で人々を魅了し続ける羽佐間さんに日本の声優の歴史を伺った。

僕らの世代は声優を目指してこの世界に入った人は一人もいないと思いますよ。みんな舞台俳優かラジオドラマなどの出身者。声優という仕事が生まれた背景には、1953年に登場したテレビの存在があります。当時は、日本の映画会社はテレビに対する反発がとても強く、人気があった邦画をなかなかテレビで放送させてもらえなかった。そこで日本の放送局はハリウッド映画に活路を見いだしたのです。

最初は映画館と同じく字幕でやっていたのですが、当時のテレビは解像度が低く、字幕が鮮明に見えない。特に濁音や半濁音。「雨の朝ハりに死す」が「雨の朝ハりに死す」になっちゃった。そこでラジオドラマや新劇の若手研究生に白羽の矢が立ち、映画の吹き替えをする声優が生まれた。当時は

全てアナログで一発録りですし、そもそもみんな役者ですから、録音スタジオはまるで舞台さながらの緊張感でした。それぞれの声の役作りも半端ではなかった。

日本の声による語りの歴史には浄瑠璃や小唄、落語など古くから連綿と受け継がれてきた素晴らしい伝統芸能があります。僕ら声優はそれら先人の文化や観客の感動を土台にして、声による表現を極めて行かなければならない。声優の世界もデジタル化され、昔のような緊張感や臨場感、間が失われつつあります。そこで、いまあえてチャップリンなどの無声映画にせりふをつけて舞台空間でライブを開催しています。これが実に面白い。声優の魅力や可能性がさらに広がったと思います。声優がますます面白くなってきますよ。

声の科学

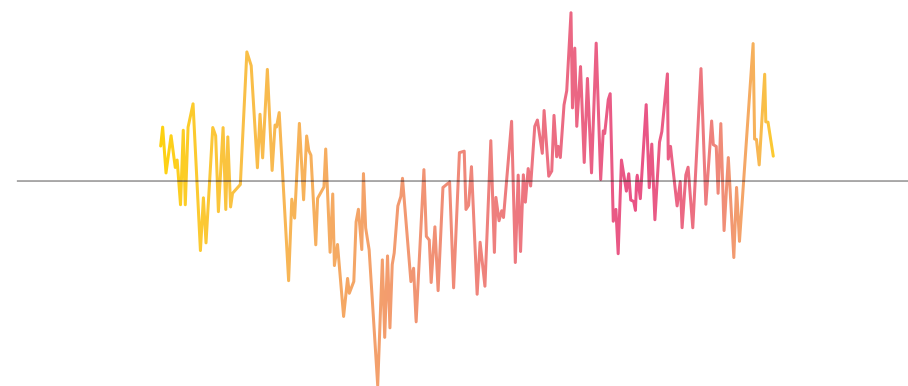
Science

普段われわれがほとんど意識せずに使っている声。

しかし「声を出し」、「言葉を話す」ことは人間の一番大きな特徴であり

それによって脳が発達して進化して文明や文化を作り上げて来た。

声の良し悪しや心地良さとは何か、科学してみた。



声は「高低」「強弱」「音色」の三要素で成り立っている。それぞれ周波数ヘルツ、音圧デシベル、波形で表される。気に障る音声は周波数が4千から8千ヘルツ。音圧が70デシベル以上。波形の密度が高く特定の部分に集中しているものである。

では心地良い声とは何か？最近の科学では、1/f のゆらぎが多く含まれているものだといわれている。図のように微妙に揺らぎながら一定の波形を示

す自然界の基本リズム。小川のせせらぎやろうそくの炎、モーツァルトやバッハなどにも含まれている。美空ひばり、ジョン・レノンなど長く愛されている歌手にも多い。

そして「通りの良い声」の条件は腹式呼吸で声帯の振動が安定し、空気の流れが乱れないことと、声が高周波数まで伸びていることの2つだけ。最終的な声の良し悪しの判断は、演者の情熱と観客の感性に委ねられるようだ。

Special Feature
VOICE

名匠インタビュー

竹本住大夫

文楽太夫

Takemoto Sumitayu

声が出せることがこんなに幸せなんや
僕は浄瑠璃が、舞台が
ほんまに大好きですねん。



えらいもんを好きになってしもたをつくづく思いますわ。2012年の7月に脳梗塞で倒れて以来、今年1月に舞台に復帰するまで、毎日毎日一日も欠かさずに、朝から暗くなるまで、体のリハビリと声のリハビリを先生について必死に繰り返しました。声が出るように出ませんのです。若い時にお師匠はんに稽古をつけてもろて、何度も何度も怒られながら、繰り返し繰り返し、厳しい修行を続けた時のことが頭に浮かびました。舞台に復帰するかどうか、正直さんざん迷いました。こんな声で舞台上がって、お客さんの前で恥かくのも嫌やし、でももう一度、舞台でどうしても浄瑠璃を語りたい。その一念ですわ。88歳でこんなに早く回復する人は見たことがないと、先生方が言うてはりました。ほんまに大勢の人の励ましと支えのお陰です。舞台上がったら、とにかく拍手が凄くて、ちょっと胸が詰まりました。こんなに皆さんが待ってくれてはんねんなあ。声が出せることがこんなに幸せなんやとよう分かりましたし、僕は浄瑠璃が、舞台がほんまに大好きですねん。

僕の声は決して良いほうではおまへん。それでも悪い声やからこれだけしか声がでないというのは、プロとして通用しない。悪い声をいかにして聞き良い声にするか。浄瑠璃は登場人物が老若男女をみんな一人の太夫が語りますが、絶対に“声”では語り分けられない。“イキ”で変えていくんでっせ。情というのも頭で覚え、耳で覚え、体で覚えて自分に染みこんでこそ出てくるのです。色気も出そうと思っ

て出せるもんやない。

先輩から「鼻使え」「^{みけん}眉間から声出せ」とやかましく言われました。下腹と腰に力を入れて、とにかく息をいっぱい吸って、鼻の裏に抜けさせて眉間から声を出します。そうすると高い女性の声が自然と出る。理屈でわかってても体で覚えんとあきまへん。先代の喜左衛門師匠が「お前、鼻使えるようになったな」と言うてくれはった時は嬉しかったです。「イキを詰める」というのも難しい。口を閉じて息を止めたらあきまへん。口を開いたまま詰めるからこそ、浄瑠璃の文章と文章の間の余韻を楽しむように、詞と詞の間、イキを詰めている間に心に響く情がお客さんに伝わります。半音高い声で歌うてるように言いますが、「イキを浮かしてる」と言いまんねん。

修行に修行して情を声と語りで伝えるのが太夫の商売です。とにかく基本を覚えて基本に忠実に素直にやること。それしかおまへん。そして最後は人間性。愚直に下手にやって上手に聴かせる。僕も倒れたことも含めて、これまでの全てを芸の肥やしにして一度でも多く舞台で語りたい。まだまだ自分もお客さんも納得する100点満点は取れまへん。死んでもまだ稽古に行かなあきまへんやろなあ(笑)。

PROFILE 1924年大阪生まれ。当代一の人形浄瑠璃文楽太夫。46年二世豊竹古鞠大夫(のちの豊竹山城少掾)に入門、豊竹古住大夫を名乗り、四ツ橋文楽座「勸進帳」の番卒で初舞台。60年九世竹本文字大夫を襲名。81年切り場語りとなり、85年七世竹本住大夫を襲名。89年重要無形文化財人形浄瑠璃文楽太夫保持者(人間国宝)に認定。日本藝術院会員。文化功労者。2012年に脳梗塞で倒れるが、必死のリハビリの末、奇跡的に舞台に復帰し、活躍中。

大笹吉雄（演劇評論家）

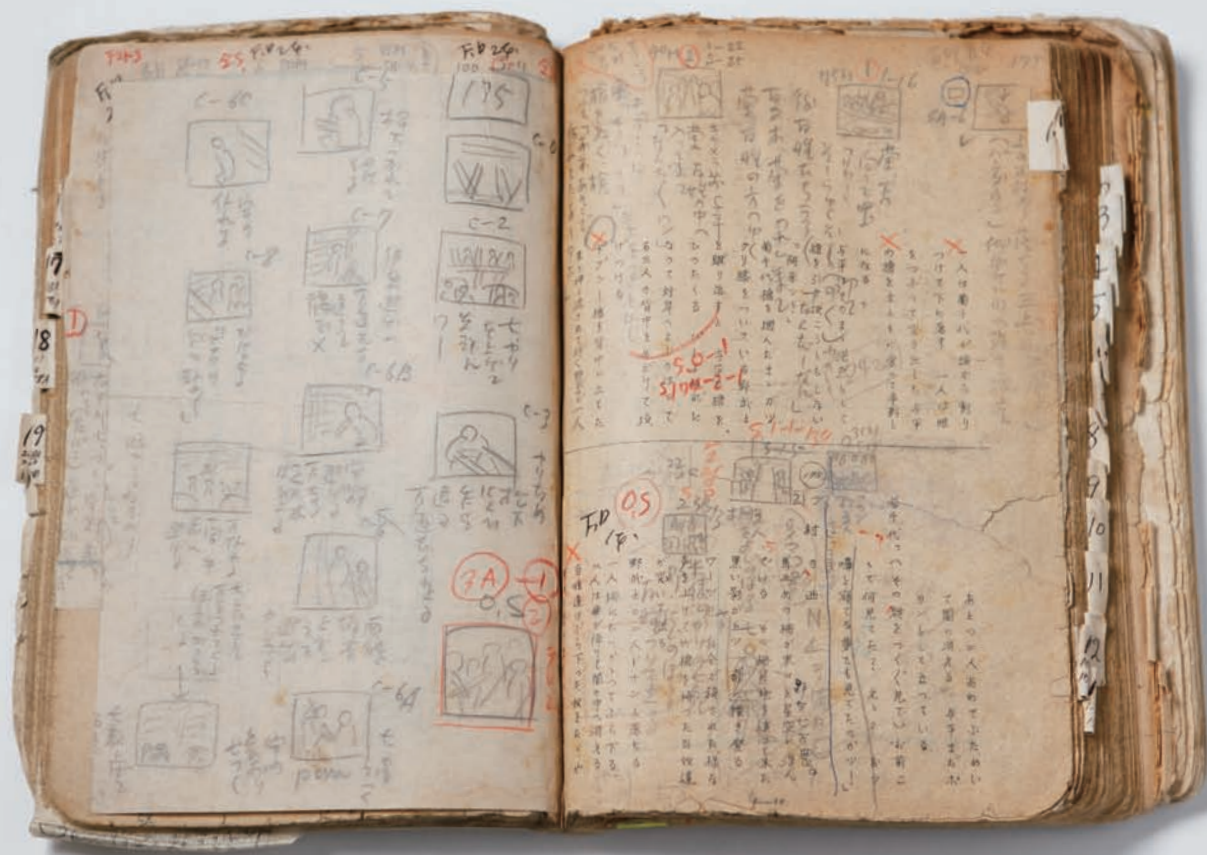
黒澤明監督作品 『七人の侍』のシナリオ

昭和三十五年に上京するまで、わたしはもっぱら映画を見て育った。

夢中になった契機が『笛吹童子』や『紅孔雀』といった東映作品で、ともに昭和二十九年に封切られている。『七人の侍』はこの前年の公開だから、わたしが見たのは再上映だろう。すっかり黒澤ファンになって、早速シナリオを読んだ。そして知ったのは、シナリオと映画はまったく別のものだった。たとえば菊千代が三船敏郎の身体や声を伴ってスクリーンに現れることなど、シナリオからは想像もつかない。その意味で別の世界であること。

やがてわたしはライブなものにより惹かれて演劇に熱を上げたが、戯曲と舞台は別のものであり、異なる魅力を持つ世界だと正確な認識を持てたのは、映画とシナリオの関係を知っていたからにほかならない。

映画はわたしの「恩人」である。



協力：野上照代（当時の映画製作記録者）

Number:001

Scenario of "Seven Samurai"



崎原綾乃（琉球文学 博士）

琉球古典芸能に使われる 赤足袋

琉球古典芸能の組踊や琉球舞踊で鮮やかな紅型衣裳などの裾からちらりと覗く赤足袋は、鮮やかで印象深いものである。琉球古典芸能で赤足袋を履くのは、女性か成人前の少年である若衆の役である。琉球王府の古文書には「緋紗綾足袋」と出ている。なお、琉球古典芸能の足袋は白足袋か赤足袋である。

琉球王府時代、日常の足袋はいろいろな色があったが、自由に履けるものではなかった。庶民は足袋禁止。士族でも身分の高い者にしか許されないものであった。琉球の歴史書『球陽』の1750年の記事には、老人と病人に限り、水色か玉色の足袋の着用を許すと出ている。足袋ひとつで、身分も分かるのである。

琉球古典芸能で、足元からほんの少し見えるだけの赤足袋にも、琉球の歴史の一端が詰まっているのである。

協力：宮城洋子琉球舞踊研究所

Number:002

Red TABI

「フェス」という言葉を耳にしたことがあるだろうか？主に屋外で行われるロックやポップスを中心とした大規模な音楽イベントのことで、国内だけで年間およそ200件も開催されている。

中でも多数を占めるのが「夏フェス」。実はこれこそ誰もが最高の夏休みを過ごせる絶好の行楽イベントなのだ。若者も子ども連れも、そしてシニアも一緒に音楽のシャワーをたっぷりと浴びて過ごす夏の一日。きっと忘れられない思い出になるはず。今年の夏こそ、「夏フェス」がオススメ！



五感がよろこぶ音楽のお祭り

夏フェスの魅力は、何と言っても、夏独特の解放感と音楽が溢れる空間。まさに、現代のお祭りだ。空に広がる音とリズムに身を任せ、みんな自由に歌ったり踊ったり。ワクワクせずにはいられない。自然と音楽のコラボレーションは格別。大きな音を出す特性上、会場は人口の密集していない場所にある。山の中や海のそば、都市に近くても大きな公園の中など、日常から離れ自然を直に感じられるところで開催される。会場に着くまでの旅にワクワクし、音楽に包まれながら、流れる雲を見つめたり、風を感じたり、緑の中を散策したりと、五感で楽しむことこそが夏フェスの醍醐味なのだ。

子どもと一緒に思い切り汗を！

音楽は良く分からない…なんて心配は無用。多くのフェスが、ロック、ポップスから、ジャズや歌謡曲、世界の音楽に至るまで、さまざまなジャンルをラインナップ。普段聴くことのないジャンルやアーティスト

でも、「意外にいいねえ！」という発見も。それがライブの力だ。日常とは違う音楽一色の環境で、子どもと大人が一緒になって音楽に夢中になる。子どもが新しい感性を見せてくれたと喜ぶ声も。最近はキッズエリアを設けて遊具を備えたり、託児所があるフェスも。また座ってのんびり音楽を聴く人も多い。子ども連れでもシニアでも、みんな思い思いの時間を過ごせる。その「自由」という一体感が気持ちいい。



お祭り気分を満喫！

通常のコンサートとは違い、お祭り気分で食べたり飲んだりしながら楽しめる。地元の特産品や世界中の料理に腕を振るう出店が並び、心もお腹も満たしてくれる。夏フェスの楽しみ方は本当に千差万別。誰と行く？どのフェスに？どんな風に過ごす？予算は？夏の特別な一日は、できるだけ早めに計画したい。各フェスのホームページやファンサイト、個人の体験情報などが参考になる。なお、チケットは早めに完売することもあるので、とにかく善は急げ。夏フェスの会場でお会いしましょう！



ちょっと特別な準備が必要！

夏フェスをとことん楽しむために欠かせないのは事前の準備。動きやすいTシャツにパンツが基本。真夏の屋外では汗だく必至。着替えも是非持っていきたい。広い敷地内を移動したり、踊ったりするにはスニーカーがベスト。タオルに帽子、日焼け止めも必須アイテム。水分補給の飲み物はちょっと多めに。念のためレインコートも。そして渋滞やトイレの混雑なども考えて、時間には十分な余裕を。音楽+お祭り+ピクニック=夏フェス。準備から楽しもう！



ファミリー・初心者向け

JOIN ALIVE	北海道	北海道・いわみざわ公園	2013.7.20(土)・21(日)・27(土)・28(日)
FM802 MEET THE WORLD BEAT	近畿	大阪府・万博記念公園	2013.7.28(日)
WORLD HAPPINESS	関東	東京都・夢の島公園陸上競技場	2013.8.11(日)
音楽と髭達	中部	新潟県・国営越後丘陵公園	2013.8.31(土)
Sunset Live	九州	福岡県・芥屋海水浴場キャンプ場	2013.9.6(金)・7(土)・8(日)

大自然と音楽！（中級者以上）

FUJI ROCK FESTIVAL	中部	新潟県・苗場スキー場	2013.7.26(金)・27(土)・28(日)
RISING SUN ROCK FESTIVAL	北海道	北海道・石狩湾新港樽川ふ頭横	2013.8.16日(金)・17日(土)

番外編・地域に密着！（春フェス）

ARABAKI ROCK FEST.	東北	宮城県・みちのく公園北地区	2013.4.27(土)・4.28(日)
うたの日コンサート in 嘉手納	九州	沖縄県・嘉手納町兼久海浜公園	2013.6.29(土)

※その他多数のフェスがあります。あなたにピッタリのフェスを探してみよう！

裏舞台 という名の 表舞台

舞台は客席から見える表舞台と
見えない裏舞台によって
成り立っている。
舞台を裏で支える人に光を当てる。

STAGE 01

緞帳

Doncho

龍村美術織物

Tatsumura Textiles Co.,Ltd.



Photo / Tomokazu Nishizawa

劇場の主演は演者が繰り広げる舞台なの
はもちろんだが、劇場には隠れた名脇役が
存在する。その一つが緞帳である。舞台と
客席との間を仕切り、実演の始まりと終わ
りの合図を果たす重要な役割なのだが、舞
台好きでも緞帳がどのように作られている
のかを知らない。京都の古き良き伝統技術
を継承し、日本各地の劇場はもとより海外
の緞帳も制作している京都の龍村美術織物
制作部の谷口仁志さんと太田尚志さんのお
二人に緞帳の話を詳しく伺った。

「当社には初代龍村平蔵が大正時代に独創
と復元、そして美術感覚という3つの要素
を織物に導入して、『美術織物』という言
葉を浸透させてきた歴史がございます。緞
帳で用いられるつづれ織りという手法は着
物の帯などに使われる最もシンプルで自由
度の高い織り方。初代平蔵が作品として取
り組み、昭和天皇が秩父宮様ご成婚のお祝
いにと依頼されたお品物にもつづれ織りが
使われています。いわばお家芸でもあり、
昭和30年代につづれ織りを用いて緞帳を
作り始めました。縦糸を等間隔に真っ直ぐ
に張り、そこに横糸だけで模様を織り込ん
で行く。一番大きな特徴はシンプルな織り
方なので、自由度がとにかく高い。千差万
別な色や模様を用いて自由な発想で、ほと
んどどんな緞帳でも織ることができます」

緞帳は伝統工芸の粋を凝縮させた美術織
物であり、劇場の顔でもある。ではあれほ

ど大きな緞帳は一体どうやって作られるの
だろうか？

「まずは劇場の広さや構造を調査します。
緞帳がそのまま上に跳ね上がる一枚飛ばし
かドラムで巻き取る構造なのか？それによ
って幕の表面や厚みが決まる。そして実
際の緞帳の大きさの20分の1の原画を画家
の先生や当社制作部で描き上げます。その
原画に基づいて糸を染色。糸は一切ストッ
クしません。なぜかというとな何よりも原
画を忠実に再現することが重要であり、そ
のためには毎回色を徹底的に吟味して、別
注で糸を染色。染まった糸は絵の具を混ぜ
る様に何色かを一緒にして撚り、さらに微
妙な色合いを作ります。全てに妥協せず
に自分たちの手で一から制作しているのが
こだわり。染色と並行して原画を拡大して
織り下絵を起こす。この設計図を縦糸を張
った織機の下に敷き、職人が一目一目横
糸を織り込む。一日20センチが限度です
ね」

緞帳は大きな織機で力業で織っているの
かと思いきや、さにあらず。一人の職人が
一間（約180センチ）の横幅を担当して数
人がチームプレイで制作している。

「工場というよりもここは体育館みたいで
しょ。織り下絵を描く時は紙を床に広げて
這いずり回って描いていますし、染色や糸
の撚り、織る工程も、ほとんど全て昔な
がらのアナログで手作り。何でデジタルや機
械を使わないのかと聞かれますが、使いよ

うがない。下絵を描く時は原画のタッチや
細い線はコンピューターでは描けません
し、織る時も微妙な糸の締め加減や糸目の
調節などは機械では決してできない。原
画の忠実な再現と美術織物として緞帳を
作るには熟練の手作業が不可欠です。私
どもはみんな緞帳を作るのが大好きで楽
しみながら作っていますから、できた時は

本当に嬉しいですね。劇場で是非幕間に
でも私たちが作った緞帳をじっくりと見
て下さい。遠くから見て、今度は近くで
細かい糸目も見たい。つづれ織りの
帯を締めて劇場でつづれ織りの緞帳を愛
でる。芝居の楽しみの一つに緞帳を加え
ていただければこれほど嬉しいことはあ
りません」



「星明り」北郷村総合文化センター



「世界に輝く」伊万里市民センター

PROFILE 初代龍村平蔵が1894年に創業以来、現在四代に至る。織物組織の実用新案をはじめ、正倉院宝物製や古代製、名物裂等の復元研究を行い、「創造と復元」の道を究め、織物美術を確立。四代龍村平蔵の下、帯地をはじめ室内装飾裂、つづれ織緞帳などの創作織物を製作販売している。つづれ織緞帳は全国各地の公共施設、劇場に納入していて、本年開場した歌舞伎座にも納入している。

プロジェクション マッピング

Projection Mapping

チームラボ

teamLab Inc.



Photo / Anna Hosokawa

CG映像とパフォーマンスや舞台を融合させ、MR（Mixed Reality：複合現実感）を味わえるプロジェクション・マッピングが注目を集めている。劇団朱雀^{すざく}2代目早乙女太一が、映し出された影絵の動きと共にダイナミックな剣舞を舞台上で繰り広げたり、昨年のNHK紅白歌合戦の『嵐』の舞台では、斬新な映像表現による舞台演出が話題となった。さらには「水」をテーマにした三浦工業の「ウルトラピュアソフトウォーター CM」では、まるで本当に水中

でパフォーマーが水と遊び、踊っているような不思議な感覚を味わえる。CG映像によって背景や空間を作り出し、演者と共演する。これらを手がけているのはテクノロジスト集団・チームラボ。CGアニメーターとして多数のプロジェクション・マッピングを使ったプロジェクトに関わってきた同社の寺尾実さんにその特徴や魅力を伺った。「僕らがこれまで製作してきたプロジェクション・マッピング作品というのは、限られた時間軸の中で決められた演出を完璧に

演じきることに美学がありました。実現するためには、優れた演者との共演が作品の鍵になっています。作品を作り上げるためには、演者と何度もリハーサルをして、身体にパフォーマンスを焼き付けてもらいます。同時に、演出や映像制作も、試行錯誤しながら進めていかななくてはなりません。その二つの要素を、限られた時間の中で作り上げていくのです。僕らチームラボは、テクノロジスト集団です。テクノロジーでカバーすることで、最終的なクオリティアップができないか？ それを模索しながら「ウルトラピュアソフトウォーター CM」を製作しました。テクノロジー、演出、アイデア。そうした、さまざまな表現の要素を組み合わせることで、演者の動きなどに反応して空間自体を変化させる、このCM作品が生まれました」

チームラボにはCGアニメーターをはじめ、プログラマーやコンピューターヴィジョンなど、さまざまな分野のエキスパートが集結している。「アートや文化が大好きということもありますが、僕らは、技術だけでなく、演者や観客が感動するための手立てとは何かを常に考えて製作している。例えば、プロジェクション・マッピングという手法は、アニメや映像表現の中ではなく、現実空間で活用するという発想が新鮮だし面白い。CG映像が現実空間に飛び出していくような面

白さです。手法自体よりも、飛び出すようにフレーム感覚がなくなったことが衝撃でした。アニメを含めたこれまでの映像表現では、まずはフレームありき。限られた枠の中に何をどう収めるかが一番重要でした。そこに技術や作業が集中します。ところが、この手法を使えば、空間自体を作ることができるのです。もはやフレームは存在しません。プロジェクション・マッピングの現実空間での活用の可能性は、これからもっと広がると思います。例えば、これまでは舞台を動かしたり、ライティングによる演出くらいしかできなかったライブも、空間を映像で演出することで、今まで体験したことがない感覚や感動が味わえるようになるのではないのでしょうか」

まさに変幻自在。空間表現や演出効果におけるイノベーションともいえる。「舞台芸術にも、さまざまな活用が考えられます。特に伝統芸能の歌舞伎で使ってみたいです。プロジェクション・マッピングを使うことで、瞬時に空間を変化させたり、拡張したり、劇場を縦横無尽に使った演出も可能になります。伝統芸能と最新技術とを融合させ、新たな表現と価値を生み出す。考えただけでもワクワクします。プロジェクション・マッピングがそのきっかけとなってくればとても嬉しいです。今年は観客が感じたことのない体感、感覚をもっと演出していきたいと思っています」



チームラボ、三浦工業株式会社、2012、TVC

PROFILE チームラボは、プログラマー・エンジニア、数学者、建築家、CGアニメーター、Webデザイナー、グラフィックデザイナー、絵師、編集者など、情報社会のさまざまなもののづくりのスペシャリストから構成されているウルトラテクノロジスト集団。http://www.team-lab.net/

津軽三味線界の革命児

Photo / Kohei Nakamoto

浅野 祥
Asano Sho

浅野祥は世界を見つめている。津軽三味線で国内の大会を総なめしてきた彼は、民謡の伴奏楽器だった三味線に新たな息吹をもたらす試みを続けている。「一般的に浸透している三味線への古い概念を打ち碎き、三味線の可能性をもっと開花させたい」と熱く語る。ピアノやドラムなどとのアンサンブル、ラップやフラメンコとのコラボレーションにも積極的に挑戦。古いも

のを捨てて新しいものだけを取り入れがちな世の中だが、古き良きものを大切にして、そこから新しい音楽、新しい価値を創造したいと全国各地をまわり実演を続けている。10年後には?「毎日ライブをしたい。そして世界中のさまざまな人から新しいヒントをもらって、クリエイティブで前向きなエンターテイナーになりたい」今後の浅野祥の舞台が楽しみだ!

PROFILE 宮城県仙台市生まれ。2004年、津軽三味線全国大会最高峰のA級を14才で最年少優勝。06年まで3連覇を達成し、同大会の殿堂入りを果たす。ジャンルを超えてのコラボレーションも数多く、海外での評価も高い。被災した自宅の床柱でできた三味線とともに被災地での公演も積極的に行っている。みやぎ絆大使。

過去の感動を今に、今の感動を未来へ



人間としての根源的な喜びや快感とは、人に何かを伝えることができた瞬間に感じるものだと思います。バレエも身体での表現を通して舞台と観客とが気持ちを共有したり、相互の手ごたえを感じた瞬間に喜びや楽しさを感じる。でも幼い頃からバレエをはじめた私は、踊るための技術という大きな壁、手ごわい相手に悪戦苦闘の日々。バレエの本当の喜びに気づいたのは実は現役を退いてバレエを教えるようになって

てからでした。「過去に敬意を払いながら、未来へ続く使者となって、現在に集中する」という私の大好きな言葉があります。バレエはクラシックなイメージが強いですが、現代の観客に向け、創意工夫された演出で総合芸術ならではの公演も生み出されています。「過去の感動を今に、今の感動を未来へ」、形を変えつつも感動を伝えることが何よりも大切。是非バレエの素晴らしさを舞台を観て感じてほしいですね。

小山久美＝慶応義塾大学文学部卒業後、スターダンサーズ・バレエ団入団。文化庁在外研修員としてアメリカのバレエ団でも活躍。2003年スターダンサーズ・バレエ団代表、総監督に就任。08年より昭和音楽大学短期大学部教授。

アートディレクターの眼

最近色々な公演のフライヤーが面白くなって来ている。ここでは7月から9月に上演される、劇団・ダンス・演奏会などのフライヤーの中から、ちょっと気になるものを、本誌アートディレクターが選んでみた。



『象』
2013年7月2日(火)～21日(日)／新国立劇場
作:別役 実／演出:深津 篤史
デザイン:good design company
作品名の「象」から発想したのでろうが、メインビジュアルに「ひび割れた大地」を使ったのは秀逸。この舞台は原爆をテーマにしたもの。ひび割れた大地の中に原爆のドームをこっそり忍ばせるなど、デザイナーのこだわりとセンスを感じる。鮮やかな黄色と抑揚のない文字の配列が逆に舞台の奥深さを表現していて、ちょっと観てみたくなる。

新村則人＝アートディレクター。1960年山口県生まれ。主な仕事に資生堂、無印良品キャンペーン、エスエス製薬、東京オリンピック招致など。



『ジャングル・ジャンクション』
2013年7月12日(金)～15日(月)／シアター1010
原作:高橋いさを
脚本:成井 豊+真柴あずき／演出:成井 豊
デザイン:デザイン太陽と雲
写真が重なった部分では是非見て欲しい。特にストライプが重なってチェックになっている部分など、その巧みさに感激。三つの物語の主人公が東京のど真ん中で出会うという設定を上手く表現しながらも、タイトルの入れ方や、紙・印刷にも凝っている。実物のフライヤーを見たら、舞台も観たくなるかも。

BOOK

『21世紀アメリカの喜劇人』
長谷川町蔵
SPACE SHOWER BOOKs 1680円(税込)

「アメリカン・ジョーク＝大味」という先入観を解放させ、キーパーソンやテレビドラマ、映画史をわかりやすく描いたガイドブック的な本。



『この世は落語』中野翠 筑摩書房 1575円(税込)

「人間の愚かしさの総合カタログ」のような落語の登場人物の魅力を伝えるエッセイ。落語の「ためにならない」素晴らしいさを実感できる。



『狂言兄弟 千作・千之丞の八十七年』
茂山千作、茂山千之丞、宮辻政夫(編)
毎日新聞社 2310円(税込)

狂言の名手としてともに名を残した兄弟の人生模様。エピソードを通じて、感性の兄、理論の弟それぞれの魅力を余すところなく語る。



『言霊』山岸凉子 講談社 630円(税込)

バレエの道に進みたいが、本番に弱い。練習ではうまくいくのに…。そんな悩みを解決するのは?コンクールに向けた葛藤を描いた青春漫画。



〈選書〉SHIBUYA PUBLISHING & BOOKSELLERS 住所:東京都渋谷区神山町17-3 テラス神山1F tel:03-5465-0588
営業時間:[月・土]12:00-24:00 [日]12:00-22:00／イベント等により変更有 www.shibuyabooks.net

PRESENT

A. 山川静夫サイン入り本
『歌舞伎は恋 山川静夫の芝居話』
淡交社 1680円(税込) 5名様

恋は理屈ではない。歌舞伎もそんな感性のほとばしりでありたいと、歌舞伎の世界を様々な視点でつづったエッセイ。日本文化の示唆にも富む、味わい深い1冊。



B. 『新国立劇場バックステージツアー』ご招待
10月4日(金)14:00-15:30
10組20名様

通常の客席からは見ることのできない、ペールに包まれた舞台裏を特別にご覧いただけます。



[プレゼント応募方法] SANZUIウェブサイト(<http://www.cpra.jp/sanzui/>)よりお申し込みください。締切は9月2日(月)。当選された方には9月10日(火)までに発送をもってかえさせていただきます。





リレーエッセイ 第1回

野村 萬「伝承に生きる」

Illustration / Asuka Kitahara

私が理事長を勤める能楽協会では、若い世代の観客にアピールするような企画を、若い役員の人たちに考えてもらい、第十一回ユネスコ記念能として国立能楽堂で実施致しました。五つの流儀が、同じ曲、同じテーマで演じるという内容で、これまで避けてきたやり方ですが、演者は互いに競い合う「立ち合い」の心を知り、観客も受身に観るだけではなく、「勝負を判定する」に近い、積極的な関わりを持ち得たようです。能楽の世界に迎え入れたいという思いが若い観客に伝わったと言えるでしょう。

伝承に生きている人間にとっての使命とは、伝えられて来たものを己の舞台表現としていかに時代に位置づけるかです。また、後継者を育てることも大切な役割として担っています。もう一つの、実演家を持つべき重要な要素は、プロデューサーとしての力ではないでしょうか。自己の技芸の研鑽と後継者育成とともに、企画制作力がある。若い人たちに企画制作を委ねたのも、そういった意図からでした。芸団協前会長の中村歌右衛門さんも、お若い頃、「蒼会」を主催なさっており、この三つのことに挑戦なさったのは、先人として実に素晴らしいことです。

時代に生きるということは、時流に乗ることとは異なります。時流は線香花火に終わってしまうことが多いものですが、伝承は生き続けます。親から子へ、子から孫へ伝えられ、古いものが新しく再生されていく。

時代に生きた芸は歴史に残るのです。芸能に感動するということは、心そのものが働いていないと生まれてこないのではないのでしょうか。私たちは幼いころから稽古を受け、本能的に身体で感じ五感を磨いて来た。そういうものがないと人前で己を晒すことはできません。己の内なるもの、身体の充実感がないと観客を前にすることはできません。能舞台はどこからでも見られるようにできています。そういう空間に耐えられるようにしておかなければなりません。

世阿弥の言葉に「離見の見」というものがあります。己のやっていることを己の外から客観的に見ることを説いた言葉で、「初心忘るべからず」を原点とすれば、この言葉は稽古を積んだ上で発見される境地なのですが、それはまた舞台に向かう観客の視点でもあるのです。そっぽを向いている観客を舞台に向かわせる、劇場空間に招き入れる、招き入れた観客を絶対逃さない芸をやらなければならない。こういったことも実演家の大切な仕事になると思います。私も、たくさんの学校へ行って、小中学生に狂言を観てもらいました。子どもたちにこんなものは二度と観たくないと思わせたらご先祖に申し訳ない。この子どもたちとの一期一会の出会いが自分の人格形成、舞台のバックボーンになって今日を生きています。(談)

のむら まん=重要無形文化財狂言保持者(人間国宝)、日本藝術院会員、文化功労者/芸団協会長

NEWS

夏休み、どこに行こう？ 何をしよう？ 編集チームが行きたい！ 参加したい！ を集めてみました。

全国各地でのフェスティバル

キジムナーフェスタ2013

こどものための国際演劇フェスティバル。7月20日～28日の会期中、沖縄市の複数の会場で各国の演劇、人形劇、ダンス、サーカスなどの公演が楽しめる。シンポジウムやワークショップなども開催される。(キジムナーチケットセンター tel:098-921-2100) www.kijimuna.org



©山田毅

サイトウ・キネン・フェスティバル松本

長野県松本市で開催される音楽祭。「8月12日～9月7日、世界で活躍する音楽家によるオーケストラ、オペラ、室内楽の公演や若手育成のプログラムが目白押し。チケットに関するお問い合わせは、チケット・インフォメーション(tel:0570-063-050)まで。



アース・セレブレーション2013

8月23日(金)～25日(日)新潟県佐渡市を拠点とする太鼓芸能集団「鼓童」が開催している野外フェスティバル。佐渡の豊かな自然の中でコンサート、ワークショップ、さまざまなパフォーマンスが繰り広げられる。(鼓童チケットサービス tel:0259-86-2330)



夏はやっぱり、お祭り！ みんなで踊ろう！

阿波おどり

徳島県で発祥した400年を超える歴史を持つ盆踊り。「何は無くとも阿波おどり」の心意気で8月12日(月)～15日(木)の期間中、徳島市内の各地が賑わう。(徳島市観光協会tel:088-622-4010) 高円寺(東京都杉並区)や越谷(埼玉県越谷市)でも8月24日、25日に開催される。



第32回 浅草サンバカーニバルパレードコンテスト

浅草で開かれるサンバカーニバル。「馬道通り～雷門通りでパレードコンテストが行なわれる。ダンスのみならず躍動感、衣裳、演奏などの審査項目からなり、出場者も真剣勝負。8月31日(土)午後1時～6時(コンテストは1時半より)。



©浅草サンバカーニバル実行委員会

フェスティバル FUKUSHIMA!

2011年の東日本大震災を受け、活動を始めたプロジェクトFUKUSHIMA! 今年は街なか広場に櫓を立て、8月15日(木)にアーティストと参加者たちが一緒にオリジナル盆踊り「ええじゃないか音頭」を踊る。事前に踊りや音楽のワークショップも。www.pj-fukushima.jp



©jibiki

編集後記

ここに芸団協CPRAは、新しい広報誌「SANZUI」を創刊致します。わが国は、能や歌舞伎、文楽をはじめとする伝統芸能から、明治以降に西欧から移入され、また新たに創られたさまざまな音楽や演劇、舞踊、演芸、映像まで、まさに実演芸術の宝庫であります。そしてお家芸ともいえるIT技術とあいまって、優れた音楽や映像コンテンツが次々と生み出され、海外でも高く評価されています。これらの実演芸術の素晴らしさ、楽しさ、感動を、幅広い世代に知っていただき、一人でも多くの方に体感していただきたいという思いを込めて、この「SANZUI」を創刊する運びとなりました。

「SANZUI」は「演ずる」の偏である「う」のことで、水の流れを象形化したものです。水のように人々の身体の中に深く浸透し、潤し、生命を育む。実演芸術もあらゆる人たちの生命を育み、生きる喜びと感動を共有し、明るい未来を創ることができると信じて、命名しました。

この小冊子の表紙をご覧ください。そうです。この表紙は綴帳であり、この「SANZUI」は劇場なのです。横にして一幕一幕、そっとめくって、そこに繰り広げられる舞台をゆっくりお楽しみ下さい。表紙の写真は生まれたての赤ちゃんです。生まれるとすぐに泣いて、自分の存在をアピールし、何かを訴えています。これこそ人間の初めての表現であり、実演芸術の本質だといえましょう。赤ちゃんのように純粋な心で、いま産声を上げた「SANZUI」に、どうぞ期待下さい。そして芸団協CPRA共々、今後ともご愛顧とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

【編集人/松武秀樹】

発行/公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会
実演家著作権接権センター(芸団協CPRA)
<http://www.cpra.jp>

発行日:2013年7月1日
発行人:浅原恒男(芸団協常務理事 広報担当)
編集人:松武秀樹(芸団協CPRA法制広報委員会副委員長)
編集顧問:大笹吉雄(演劇評論家)
編集:芸団協CPRA法制広報委員会SANZUI編集プロジェクトチーム
日本音楽事業者協会/鈴木明文、
日本音楽制作者連盟/板垣一誠、
芸団協CPRA/小林俊範、榎野睦子、大井優子、小泉美樹、
佐野康順、川崎佑、川島香、山本剛、井上嵩
編集者:山縣基与志(JAPANOLGY-MUSEUM)
アートディレクター:新村則人
デザイナー:庭野広祐(新村デザイン事務所)
協力:芸能花伝舎、茅ヶ崎産婦人科、茂呂颯姫

坂東玉三郎

Bando Tamasaburo



「京鹿子娘道成寺」の舞台より Photo / Takashi Okamoto

舞台に立つために朝起きて、 明日の舞台のために生きていく



Photo / Takashi Okamoto

舞台こそ人生のすべて

美という言葉はこの人のためにあるのではないだろうか？一度でも舞台を観るとその美しい姿や立ち居振る舞いが目に強烈に焼き付き、心を激しく揺さぶられる。歌舞伎俳優という枠を遙かに超え、世界の一流芸術家とのコラボレーションを実現させ、日本はもとより世界から賞賛され続ける五代目坂東玉三郎さん。歌舞伎座終演後の観客の興奮がまだ残る中、舞台芸術の魅力や将来について話を伺った。

「演技というのは人間の感情の再構築だと私は考えています。そして人間の感情表現というのは『感受』、『浸透』、『反応』という3つの過程を辿って生まれます。われわれ俳優は舞台で、その感情を再構築するわけです。それでは感情を伝えるために根本的に一番大切なことは何か？それは人と人との間に劇場という場で出会うことだと思います。今ではテレビやDVDやコンピュータなどがあり、そこで演劇も観ることができる。でも、やはり人間同士が同じ時間と空間を共有して、一体となって観ることが舞台芸術の一番の価値だと思いますし、大事にしていかなければならないことだと思うんです。これは劇場が大きかろうが小さかろうが、昔も今も同じだと思います。江戸時代の芝居小屋でも今の歌舞伎座でも俳優が観客の目の前にいるということ。これは古今東西、万国共通です。

今はたくさんさんのメディアが登場して、手軽な楽しみ方が増え、劇場に足を運ぶお客様が減少しているという時代ですが、どんなに進んだ映像があっても、目の前で繰り広げられる演者の気迫や感情の表現、アクロバティックな動きや、意外性、そして演技の奥にあるものは、実際に目の前で体験してみないことにはその本質は伝わらないと思うんです。そして芝居というのは異次元の世界です。非日常の時空間を俳優と

大勢のお客様とが共有して作り上げるものです。ですから、そういう魅力を感じてもらえるものをどうやって作っていくのか、あるいはお客様がどうやってその魅力を見つけてくれるか、何を望んでいるのかを常に私たちも考えていかなければならないのだと思います」

舞台芸術は一朝一夕にできたものではない。先人の涙ぐましい精進や情熱、観客の感動が次々と伝承され、長い時間をかけて進化し熟成され続けてきた。そして今を生きる玉三郎さんも芸術家として頂点を日々追い求めている。

「私はいろんな意味で自分の人生をかけて芝居をしているつもりです。簡単に言うと、人生のすべての時間を舞台の上で演じる瞬間にかけているということのように思います。日頃の健康や自己管理もそうでしょうし、お稽古もそうでしょう。作品に対する俳優としての取り組みの時間、いろいろなものを見たり調べたり、身につけるものを用意したり、時には素材から探して職人さんに作ってもらうこともあります。衣装だけでなくお化粧も含めて、いつも最高の状態で舞台に立つように務めています。スムーズにその役に入っていく手立てや舞台での芝居が絵になるために、いつも考え続け、舞台の一瞬のためにできる限りのことはやらなければならない、やり続けなければならないのです。

俳優の修行というのは 若い時にあれこれ迷ったり、いろんなことに興味を持ち、一つのことに集中することが難しい時期にあえて脇目もふらずに集中して修行したことが一生を左右し、後々どれだけ自分に返ってくるか計り知れません。年齢を重ねていくと脇を見ている暇は無くなってきました。無事に舞台を務めることで精一杯です。若い時のように終演後どこに行こうか？開演前にどこかへ寄つていこうかという気などもおきなくなります。今では舞台に立つために朝起きて、終演した



私はお客様を、 異次元の本質的な世界、 見えない世界に 連れていく案内人

ら明日の舞台のために生きていく。嫌でもそうやっていくんです。若い時は力があります。力が有り余っている。その余力をどうやって内なるものに持っていく、それをどう一生続けていくのか俳優としての生き様です。

普通に生きてきて、普通の人間が舞台に立つのではない。良かれ悪しかれ俳優は超人的でなければならぬでしょう。だからこそ凝縮された修行をして舞台に立たなければお客様は感動しないし納得して下さいません。舞台で生き残るためには一人ひとりの自覚と修行が不可欠です。そしてそれを何気ない形で見せることがさらに大事です。凄いでしょと言って舞台に立つのではなく、何気なくやるからこそお客様は心から楽しめると思うんです」
すべては舞台の美のために、そして

玉三郎さんの美の奥には厳しい修行や鍛錬、飽くなき美への好奇心と探求があった。演技の奥にある世界についてさらに話は続く。

実演芸術の灯は決して消えない

「私が演技で一番大事にしていることは、役者を観ながら、あるいは芝居を観ているながら、その奥にある別の世界を感じてもらうことです。眼で楽しんでいるうちは三次元的ですよ。楽しんでるんだけれど知らないうちにさらに異次元の世界に誘^{いざな}っていく。異次元といっても何も霊的な世界とかそういうのではありません。奥深い人間の本質ということでしょうか。幕がいて観ている世界よりもっと奥に時空を超えた異次元的世界がある。お客

様がそれを感じて体験ができることこそ、素晴らしい舞台だと信じています。例えばなぜ『鶯娘』のような踊りをやるのか？それは非現実の鶯娘を窓口にして、異次元の世界に入り込める。鶯娘が死んでいくことによって人生が見えてきたり、観ている人の中に悲哀を感じて頂いたり、叶わぬものが見えてきたり…。鳥である必要はないのだけれども鳥であることによって、逆に人間の悲哀や魂や感情が浮き彫りになり、観ている人達の中に入ってくる。ただ綺麗だねで終わっては観る意味はないかもしれません。すべての思いは叶わない、怨んでも怨んでも報われない情念などを清姫を通して表現したり、仏教でいう諸行無常や色即是空の世界を舞台で垣間見て貰いたいのです。それは劇場の中のことだけではなく、自分の人生の問題だし、人間の普遍的なことだと思います。行き着くところは舞台も哲学や宗教と同じなのかもしれません。

華やかな見た目や美しい衣装、だったりというのはあくまでも手立てなのです。具体的に目の前で演じられていることの奥にある世界を本当に理解する。もちろんそれが綺麗だとか美しいと感じることも先ずは大事だけれども、舞台の本質は奥にある世界をお客様に感じてもらうことだと私は思っています。そしてそのためには、やはり私自身が人生のすべてを舞台のために捧げないと伝えることは難しいと思います。私はお客様を異次元の本質的な世界、見えない世界に連れていく案内人だと思っています」

奥にある世界があるからこそ、舞台を観て感動して、生き方を見つかったり、悲哀や恋心を感じて、人生により深みをもつて生きることができるようになるのだろう。そんな舞台芸術の将来を玉三郎さんはどのように考えているのだろうか。

「舞台に関わる者は本当に頑張らなければと、つくづく思います。実演芸術

の灯は決して消えないと思うし、消してはならないものだと思います。歌舞伎などは養成所もいいですけど、まずは小さな子ども達を集めて踊ったり楽器を演奏したり、そして声を出す場を作らなければならぬと思います。小学校などでも音曲などにいつでも触れられたら最高ですね。頭ごなしに教えるということではなく、楽器に触れて「チン」、「トン」、「シャン」とやっているうちに好きになってくる。そうすればお稽古しろと言わなくても勝手に続けられるでしょうし、好きこそもの上手なれということです。これがきっかけとなって志を持って、お稽古を続けて舞台への道を歩んでいく子が一人でも増えて欲しいですね。

歌舞伎は役者300人に対して3000人の裏方が支えて舞台ができて上がります。小道具の職人さんの後継者問題や素材の入手も難しいものもあります。そういったことも含めて、舞台で人と人が出会い、別の世界を感じてもらうために今われわれが何をしなければならぬか、そしてとにかくやってみることが急務だと思います。

最近とても嬉しかったことがあります。ダンスパフォーマンスの世界で二十代三十代の若者が実演することに興味を持って、自分たちで活躍する場を作って頑張っているということを聞きました。さんさんバーチャルだ、デジタルだっていう世界に浸りきって、逆に実演というものを新鮮に感じたり、人と人とが実際に会わなければ生まれない感動や感情の大切さに気づいてきたのかもしれない。これは大きな希望です。私もこれからも人生のすべてを舞台に捧げて、これまで以上に精進していくつもりです。皆様、是非劇場でお目にかかりましょう」

PROFILE 歌舞伎俳優、当代きつての人氣と実力を誇り「奇跡の女形」といわれる。屋号は太和屋。7歳で坂東喜の字(きのじ)の芸名で初舞台を踏み、1964年歌舞伎座「心中は水の明日」で5代目坂東玉三郎を襲名。2011年京都府賞、12年に重要無形文化財歌舞伎女形保持者(人間国宝)認定、13年フランス芸術文化勲章最高章である「コマンドゥール」受章。

坂東
玉三郎

Bando Tamasaburo



「京鹿子娘道成寺」の舞台より
Photo / Takashi Okamoto